

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立飛騨特別支援学校 高山日赤分校

学校番号 119B

自己評価

学校教育目標	・主体的に生きる力を育てる ～気づく、考える、動く～	
評価する領域・分野	「教育活動・学習指導」	
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人のよさや可能性を伸ばそうとしている当校の教育方針、教育内容に児童生徒、保護者とも高い評価をしている。卒業後、特に重度の障がいのある児童生徒が学校のように安心して生活できる環境が整うとよいと感じている。 児童生徒の実態、小規模校のため、社会性や主体性を大切にしたい教育活動が重要である。個に応じた支援内容、肢体不自由教育、病弱教育の高い専門性が必要とされている。 	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	・児童生徒の目指す「気づく、考える、動く」姿を引き出すための授業づくり	
重点目標を達成するための校内組織体制	教務研修部、研究研修委員会：研究は、研究グループを3つに分かれ、対象児童生徒を中心に授業づくりを行う。	
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の目指す「気づく、考える、動く」姿を達成するための授業づくりを行う。実践研究とし、対象児童生徒を中心に授業づくりを行う。研究グループ①高等部（通常学級）②中学部（重複学級）③小学部（重複学級）また、肢体不自由、病弱教育の研修会を中心に教職員に積極的に紹介し、参加者は報告を行う。 様々なグルーピングで集団での学習を保障する。「ゆうぐ・ユニオン」（小・中・高：自立活動）「体育」（中・高）「作業」（中高：作業学習、自立活動） 教材・教具の工夫及び地域資源を活用した学習を設定する。パソコンやタブレット端末等支援機器を使った授業、一人一人の動きを引き出す教材・教具の創作、地域へ出かける学習 	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> 各研究グループで、目指す姿を達成するための具体的な支援を考えたことができたか。 一人一人の目標を達成するための授業のグルーピングは適切であったか。 教材・教具の工夫及び地域資源を活用した学習が活発に行われたか。 	
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> 対象児童生徒の個別の教育支援計画や指導計画、指導と評価の年間計画をもとに身につけたい力を明らかにし、児童生徒の主体性をキーワードに、具体的な支援を考え、授業づくりの具体的計画、実践（研修授業）、振り返りを行った。 「ゆうぐ・ユニオン」は、大型ブランコやエアートランポリン等、大型の遊具を使い、順番、仲間の活動を見るなど工夫しながら、ダイナミックな活動を設定した。「体育」は、全員で集団行動、ダンス、ボッチャ等を行った。車いす生徒と独歩可能な生徒がいて、種目・取り組み方等工夫を行った。「作業」は、紙すきを中心に行った。作業学習として自立活動として取り組む生徒が一緒に行うことから、目標を明確にして、工程を分け、教具を工夫して取り組んだ。 大半が肢体不自由のある児童生徒で手指の障がいもあることから、各授業で、支援機器を使い、応答や描画活動等を行った。学校周辺の公園や店舗へ行く、市役所や図書館等公共施設の利用、大垣共立銀行の行員の方やブラックブルズの方からの出前授業等を行った。 	
評価の視点		評価
<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の願う姿に向けて各グループの授業づくりができたか。 一人一人の目標達成に向けての授業のグルーピングは適切であったか。 教材・教具の工夫、地域資源の活用が積極的に行われたか。 		A (B) C D A (B) C D (A) B C D
成果・課題		総合評価
<p>○成果 各グループで、「気づく、考える、動く」視点で抽出児童生徒を中心に研究を進めたことから、共通理解が図りやすく、他の授業にも支援の仕方に応用することができた。また、中肢研や他校の研修会等教職員は積極的に参加した。個々の目標からグルーピングを構成したことで、児童生徒にとって有効な集団学習となった。市街地にある立地を生かし、積極的に地域資源を利用した学習ができた。</p> <p>▲課題 研究において、全校での協議・共通理解が十分でなく、研究で得られた成果と課題を共有することが難しかった。個々の目標からの授業設定やグルーピング等の検討をさらに深める。スイッチ教材等、ICT教材の開発をさらに行い、児童生徒の主体性を育む。</p>		A (B) C D
来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> 経過も含め各グループの研究について協議・共通理解する全校研究会の充実。 個々の目標に迫る、集団授業のグルーピングと授業内容の検討 児童生徒の表出を高めるスイッチ教材の開発 	

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立飛騨特別支援学校 高山日赤分校

学校番号 119B

自己評価

学校教育目標	・主体的に生きる力を育てる ～気づく、考える、動く～	
評価する領域・分野	「進路指導」	
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部が開設され3年目となり、今年度初めて卒業生が出る。本人の実態を踏まえつつも思いを尊重した進路選択をする必要がある。 ・当校の児童生徒の実態の幅が大きい。高等部も高1～高3まで生徒が在籍している。各自に応じた進路情報の提供、関係諸機関との連携が必要である。 	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	・生徒及び保護者が納得する進路選択への支援	
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・生活進路支援部：生活支援と進路支援の業務を行っている。進路指導だけでなく、卒業後、生徒が主体的に生活できるよう支援することを同時に検討し、実践することができる。 ・高等部：高3生徒を中心に、高1、高2と進路支援について系統的に検討し、実践することができる。 	
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒自身が自己理解を深め、納得する進路選択ができるようキャリアアップウィークを中心に進路指導の充実を図る。 ・生徒及び保護者に卒業後の生活について具体的なものを提示し、関係諸機関につなげる。 	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアアップウィーク等を通して、生徒一人一人が自己理解を深めながら主体的に進路選択を行ったか。 ・卒業後の生活に向け、具体的なイメージをもって、関係諸機関と連携を図った進路支援ができたか。 	
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・全校児童生徒を対象に5月に進路希望調査を行い、希望を把握した。中・高等部の学期毎の個別懇談では、進路指導主事が入り、本人及びの保護者のニーズを把握するとともに、希望を具体化できるよう職場開拓、情報提供を行った。 ・キャリアアップウィークでは、より個々に応じた体制を整えた。高3生は、移行支援事業所で現場実習のみならず、社会人としてのマナー等も学んだ。また、在宅ワークを目指し、企業と連携し校内でテレワーク実習を行った。校内実習と並行して、高2生は、生活介護施設での実習、B型作業所での実習を行い、高1生は、進学も含め自身の進路希望を具体化するために調べ学習を行うとともに、市役所や病院の業務について見学した。 ・本人の進路希望をもとに、就職試験、面接等に向け、個別的に指導を行ったり、計画相談や卒業後の生活に必要な支援について関係機関と連携を図ったりした。 ・昨年度に引き続き、企業見学、情報モラル、就職ガイダンス等を本校と共同学習を行った。福祉サービス公社やハローワークの見学等も行った。また、合同でPTA事業所説明会を開催した。夏期休業中には職員の事業所見学も行った。 	
評価の視点		評価
・生徒が主体的に進路選択を行うことができたか。		(A) B C D
・本人や保護者に卒業後の生活をイメージし、必要な情報を提供することができたか。		A (B) C D
成果・課題		総合評価
○成果 生徒は、自分の希望する卒業後の生活に向け、自分の課題を意識して、実習や試験等に取り組んだり、必要なサービスに気づいたりして、高3生は進路決定ができた。		A (B) C D
▲課題 個々に応じた系統的な進路支援、情報提供が必要である。		
来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの高等部3年間の進路の取組や個別の移行支援計画の作成活用を通して、当校の進路支援について整理を行い、必要な情報を「進路のしおり」としてまとめ、活用する。 ・進路だよりなどで、PTA事業説明会など情報を得ることの重要性を保護者に積極的に啓蒙する。 	

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立飛騨特別支援学校 高山日赤分校

学校番号	119B
------	------

自己評価

学校教育目標	・主体的に生きる力を育てる ～気づく、考える、動く～	
評価する領域・分野	「保護者、地域との連携」	
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者は、地域に様々な方法でアピールし、当校及び児童生徒について地域の方へ理解を深めていってほしいという強い願いがある。 ・以前に比べ福祉サービスも充実してきて、仕事をもつ保護者も多く、コミュニケーションを十分に取っていく必要がある。 ・保護者、教職員とも、非常変災時に児童生徒の安全を確保するという防災への意識が高いが、避難等の難しさも感じている。 	
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者や地域と連携し、分校をアピールする。 ・保護者と連携し、防災への取組を行う。 	
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援部や渉外部を中心に地域への発信の取組を計画し実施する。 ・防災等対策委員会にて当校の防災体制の充実を図るとともに、渉外部と保健安全部が連携してPTA研修会（非常食試食会）を計画し実施する。 	
目標の達成に必要な具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・校内の取組を積極的に発信する。作品展やPTA清掃活動、地域の芸能発表会への参加等を通して、分校や児童生徒について地域の理解を深める。 ・防災等対策委員会をより機能させ、系統性のある防災対策を構築する。また、PTA研修会として、非常食試食会を開催する。 	
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> ・地域への周知の取組により、当校への関心が高まったか。 ・PTA研修会や非常変災時に備え、保護者・教職員の防災意識を高めたか。 	
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・行事、校外学習、交流学习、キャリアアップウィーク、作品展、外部講師による授業、当校への寄付等について、タイムリーにホームページに掲載した。また、積極的に新聞社等報道関係にも連絡し、地域への周知を図った。 ・十六銀行高山支店(10月)、高山赤十字病院互助会作品展(11月)、大垣共立銀行高山支店(2月)での作品展を行い、児童生徒の活動の様子の写真も展示した。 ・学習発表会(9/29)の案内やバザー提供依頼を広く呼びかけ、保護者を中心にチラシを近隣住民に配布した。当日は、80名を超える来場者があった。PTA清掃活動は、昨年度の反省から年1回にしたが、雨天のため中止した。 ・花里校下芸能発表会に今年度ステージ発表のみに参加した。直前に高等部修学旅行があり、小中学部児童生徒が中心となって参加し、合唱合奏を披露した。 ・PTA非常食試食会を行った(6/29)。食べることに課題のある児童生徒も多いため、食形態を工夫した市販の非常食を試食した。また、各自が学校に持参している非常食を、児童生徒保護者教職員が昼食に食べ、共に課題を考えた。 ・7月に高山市に初の大雨特別警報が発表された。当校にも緊急に避難した生徒の家族もあり、障がいのある子どもをもつ家族の非常変災時の地域連携や避難等の困難さが明らかになった。本校・分校とも緊急にアンケートをとり、両PTA会長と市役所福祉部の方と非常変災時の避難等、防災について協議をした。PTA、防災等対策委員会でもその話題を取り上げ、防災への意識を高めた。 	
評価の視点		評価
<ul style="list-style-type: none"> ・当校の児童生徒や教育活動について地域へ周知されたか。 ・保護者・教職員が防災への課題を意識し、対策を構築したか。 		(A) B C D A (B) C D
成果・課題		総合評価
<p>○成果 時機を逃さず積極的な発信や非常変災時の対応を図ってきたことで、当校について一層周知されるとともに、防災への課題が明確になった。</p> <p>▲課題 研修会や清掃活動、芸能発表会などPTAが主となり活動することは、小規模校で負担も大きい。教職員との連携や活動の精選を図る。また、防災に対する課題への系統性のある対策を構築し、地域にも支援を求める。</p>		A (B) C D
来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・作品展の内容など、より児童生徒の姿をアピールできる形のものにする。PTAとの共催の活動への連携の在り方を検討する。 ・防災等対策委員会を機能させ、系統性のある防災対策を構築する。また、PTA研修会として来年度は、講師を招き防災に関する研修会を開催する。 	

学校関係者評価 (平成31年3月8日実施)

意見・要望・評価など

「教育活動・学習活動」について

- ・「主体的に生きる力を育てる」という目標に向けて様々な取組をされ、成果を上げている。
- ・教職員は、児童生徒一人一人の個性に応じたきめ細やかな指導や関わりがされている。
- ・教職員は、いつも児童生徒を医療的な視点も踏まえて見ていて、一人一人の能力を引き出すかわりをしてしている。
- ・パソコンやタブレットなどを使用し、児童生徒一人一人に合わせた学習が行われている。
- ・学校の活動について、いつも地域を意識して新しいことも取り入れながら取り組んでいる。

「進路指導」

- ・特に高等部卒業後の進路に関しては、今年度初めて卒業生が出るということで、本人・保護者のニーズを把握し、希望を具体化できるよう、職場開拓、情報提供を行ったこと、本人が主体的に進路を選択し希望に合わせたテレワークや現場での実習などの取組は素晴らしい。
- ・親は、卒業後のことを特に心配していると思われるが、在宅ワークなどのいろいろなシステムがあることを知り、以前よりいろいろな選択肢があると感じた。
- ・高等部ができたことで、生徒や保護者の方も、より将来に向けてのイメージがもてるようになったと思われる。そのため、より一層、生徒の思う将来と保護者の思う将来をつなげていくことができるかが、学校では大切になってくるのではないかと。
- ・今後ますます卒業生それぞれのニーズに合った進路指導が問われるが、ネットワークを広げ、関係者・関係機関との連携を深められることを期待する。

「保護者、地域との連携」

- ・大雨特別警報発表時には、地域内では実際に被災された方がいる。避難所の開設、運営についても、小学校しか対応できなかったところは「まちづくり協議会」でも課題になっている。今後、スピード感をもって、連携して取り組む必要があると考える。
- ・学校はどこも「地域に開かれた学校」であることや、「地域との結びつき」を求められる時代になっている。対外的なことが増えるのは大変だと思うが、関わりや理解を深めながら、対応してほしい。
- ・高山市では、次年度から「コミュニティ・スクール」への取組が始まり、平成32年度からのスタートすることが決まっている。学校、教育への地域の責任も問われていることになると思うので地域にも相談してもらい一緒に考えていきたい。
- ・花里地域には、医療・福祉関連施設が多く存在するので、「まちづくり協議会」として取り組むべきこと、できることがたくさんあるのではないかと感じている。学校や保護者の方から忌憚のない意見をももらえるとよい。
- ・以前と比べるといろいろ進歩していることを全体に感じた。教職員も若い方が増え、熱心に指導されている。